

かつて遊び場だった場所で感じたこと

日本獣医生命科学大学 応用生命科学部 動物科学科 3年 齊藤 愛奈

私の地元の同級生には、実家が酪農家である友人がいる。私は小学生の時、小学生が鬼ごっこをするには広すぎるほどの牧場を駆け回り、牛の健康状態を記録するための黒板で学校ごっこもした。友人のご家族の「いつでも遊びに来ていいからね」という言葉に甘え牧場で遊んでいた私に、大きな牛に対する恐怖心などあるわけもなく、牛はとても身近な動物であった。小学生の時の私にとって牧場とは「遊びの場」であった。

月日が経ち高校生になり、友人たちと観光牧場へ遊びに行った時のことである。初めて直近でみる牛の大きさに圧倒された友人たちは、後退りをし、牛に近づこうとしなかった。私はその光景を見て、他者の牛に対するイメージと自分の持っている牛に対するイメージは違うこと、そして、私の牛に対しての愛着は小学校の頃の経験から成るものだということに気付いた。進路先について悩んでいた高校3年生の春、やはり将来は動物に携わる職につきたいと思い、現在通っている大学の教授とオンラインで面談を行った。はじめて話す教授に突然「君の1番身近な動物はなに?」と聞かれ、飼い猫が目に残った私は「猫です。」と答えた。教授は笑いながら「畜産動物だよ。お肉とか乳製品食べるでしょ?」と言った。私はその時ハッとした。まさにその通りであると思ったからだ。この会話がとても印象的であり、「1番身近な動物について勉強したい」と思ったこと、観光牧場での出来事をきっかけに、私は現在の大学へ進学を決めた。

大学では座学が中心であったが、長期休みの期間に2週間ほど動物管理施設で飼育管理の実習を行うという項目があった。同期たちが動物園や北海道の放牧が行われている酪農場を実習先としてあげているなか、私が選んだのは小学生の時に駆け回っていたあの牧場だった。自分で実習先を選ぶことが出来ることを知った瞬間から、私の実習先は迷うことなくその牧場一択だった。私が牛を好きになったきっかけの場で、どうしても学びたかったのだ。私が遊びに行っていた頃は1つの牧場を6名ほどの従業員で経営していたが、今は従業員数11名まで増え第二牧場も新たにできていた。離農しようとしていた近所の牧場を引き継いだのだと言う。来年秋には、第3牧場も開設するそうだ。酪農の経営状態はますます厳しくなっていく中、どんどん規模を拡大していこうとしているこの牧場は、絶対に何か秘策があるのだと感じた。ここで実習をしたいと言う私に対し、友人のご家族は昔と変わらぬ笑顔で歓迎してくださり、大学3年生の夏、2週間の実習がスタートした。牧場での実習の日々は、とても刺激的なことで溢れていた。子牛の哺乳、牛舎の掃除、エサやり、搾乳などの基本的な日々の業務に加え、牛の出荷といった別れの場にも、お産という出会いの場にも立ちあわせてもらった。子牛の足が出てこないという難産にも立ち会い、牛の足を引っ張るといふ貴重な経験までさせていただいた。また、牛への愛と熱意に溢れる従業員の方々にもたくさんの刺激をいただいた。その中でも、私が特に刺激を受けた人がある。それは、専門大学を卒業し、今1年目として働いている同い年の女の子の存在であった。牛に

についても詳しく、扱いにも慣れ、重機を乗りこなしている姿はとてもしも同い年とは思えなかった。業務の時間が終わると、牛の発情を見つけるために手袋と台を待って駆け出す勉強熱心な姿は、私には眩しすぎるほどだった。また、社長の思いにも心を打たれた。この牧場は、酪農教育ファームや食品残渣の利用にこだわりをもっていた。酪農教育ファームは「少しでも酪農に興味を持ってくれる若者を増やし、未来に繋げていきたい」という思いから成るものだった。酪農教育ファームよる利益は正直でない。しかし、小学校や商業施設を訪れ酪農教育ファームを行うことで、少しでも若い子達が酪農に興味を持ち、将来牛に関わる仕事に就きたいという思いを持った子たちが増えてくれればという社長の願いがそこにはあった。食品残渣を利用するのは、「従業員たちが働きやすい環境にしたい」という思いによるものだった。肉体労働なのに賃金が低い上に、24時間365日体制で休みがなく、このままでは酪農の未来が危ういと思った社長は、酪農家の働き方改革を実現するためエコフィードの研究を行なった。1頭あたりにかかる餌のコストは半分まで減り、そこで浮いたお金で従業員を雇い、ひとりひとりの負担を低減するという事に繋がった。

この牧場の社長の全ての思いは、酪農を未来に繋げたいということだと感じた。それを実現するために今を突き進む社長の姿に、私は心を打たれた。この夏の2週間は、間違いなく、有意義な時間であったと感じる。小学生の頃の私の「遊びの場」は、大変貴重な「学びと経験の場」になった。

生産の場を肌で感じ、生産者であるみなさんの声を直接聞いた私は、将来必ず酪農・乳業関係業務に携わり、生産者と消費者を繋ぐ存在になりたいと心から思った。必死の思いでみなさんが作った生産物を、消費者の元へ届けたい。そして、生産者の皆さんが働きやすい社会の実現を目指すと共に、未来を繋ぐ若者たちを増やすことも実現していきたいと思う。